
黒猫って言うな！

楓来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒猫って言うな！

【Nコード】

N3527R

【作者名】

楓来

【あらすじ】

異世界トリップした女の子が変態に絡まれて、それに慣らされて行くまでのお話。

今後、物語上で気分を害す様な表現や発言が出てくるかもしれない。そういったものが苦手な方はご注意ください。

太陽も沈みかけ、西の空は一面橙色に染まる夕方。

ピョー ルルルーピョー ルルルー

「はあく、変な鳥もお山に帰るって言うのになんなのよ。こっちはまだまだ仕事だ。ばーかばーか！あほーどーりー！」

少女は取り込んだ洗濯物がたくさん詰まった大きな籠を抱えながら、意味不明な悪態をつく。なにせ今日は朝から目が回るほど急がしかった。

なんでも少女、ネティーの奉公先ピト男爵家で明後日、大事なお客様をお招きしたパーティーを開くそうなのだ。そのために不備があつてはいけないと、御領主様は部屋の大掃除だのなんだのを使用人に命令した。いきなりのことであつたのでお屋敷の中は上へ下への大騒動。そもそもこんな辺境の土地のいち領主に、そんな立派な方が来る事があるうか、いやない。

「うちの御領主様は何をやらかしちゃったのよー……」

ネティーは不安になった。18歳の誕生日を迎えたこの春、お世話になつていた教会の伝で、領主のお屋敷に奉公するようになったのだ。なんとか自立できると思つた矢先に失業など笑えない。

「何をぶつぶつ言っているんだい。仕事をするんだ、仕事を」

失業したらどうしようと言う妄想にふけていたネティーは飛び上がった。

「うっ……、申し訳ございません、マルジ様」

マルジ様はこのお屋敷の使用人のボス……もとい、使用人長だ。

今の御領主の乳母だった方だからかなりのお年をめしているが現役でとても恐ろしい。それに、とても大柄なので小柄なネティーより頭ひとつ分大きい。

「さつさとシーツを取り込んでベットメイクをするんだよ。その後は南廊下の掃除だ。終わるまで家に帰れないと思いな」

「えっ、でも……、今日中に南廊下全部を掃除するのは不可能です」「うるさいよ。ごちゃごちゃ言ってる暇がありゃ出来るだろうよ。さつさとしな黒猫が！」

マルジはネティーを汚いものでも見るような目で見下ろしながら、ふんつと鼻息ひとつ残し、のしのしとお屋敷の方に去って行った。

ふう〜やっとおわったー！！

心の中で大きくガツポーズをする。外を見るともう真っ暗で、時計を見ると2時を大きく回っていた。

「さー帰ろ、帰ろつと」

紺の一色の使用人服からこれまたシンプルな薄緑色の私服に着替え、丘の上に建つお屋敷を出た。家は丘の麓にある繁華街の裏路地にある。ぼろアパートだったが、住めば都。ネティーの城だ。春からだからもう1ヶ月になる。

悠々自適の一人暮らしだった。そう、三日前までは。

「ただいまー」

「おかえりー」

「はあ……、あんたのせいでただいまって言う癖までついちゃったじゃないのよ」

「もう、そんな事言っちゃって実はうれしくせにいく、本当に素直じゃないんだから僕の黒猫ちゃんは」

男はへらへらとした喋り方でネティーの神経を逆撫でする。

「その黒猫って言い方やめてくれる？胸くそ悪いんだけど。差別用語ってやつなんでしょ、この世界では」

「まあねえ、黒はこの世で魔族の証だし？人間で黒目黒髪だと使えい魔扱いだもんねえ。皆に嫌われててもいいじゃないか、僕だけの黒猫ちゃん、ふふ」

ぞわわと背中を何かが走った。ダメだこいつ本当に気持ち悪い。

こんなのがこの国一番の聖者なんて笑わせる。確かに顔は超がつくくらい整ってるし、髪は最上位色の銀色。瞳は輝く太陽みたいな金色だ。顔だけじゃない、地位も名誉も持っている人。

何故こんなこの国の重要人物が一般人のお宅にいるかというところ、ネティーが一般人では無いからだ。

「ちょっと！へらへらしないで方法は見つかったの？早く日本に返してよ！只でさえあんた半年も私の事放置してたでしょ。教会の人たちがいい人たちだったから良かったものの、そうじゃなかったらどうなっただと思うの？え？答えなさいよおお」

「うぐっ……くるしっ……」

気づけば聖者ーアシエルの襟を掴み揺すっていた。

「あ、ごめんなさい。つい興奮して。でも早く日本に返してよ。異世界トリップでこんな差別される身分なんてまっぴらよ」

「けほけほっ。まあまあいいじゃないか、黒を身にまとう人間が魔

族の使いだなんて迷信みたいに思ってる人の方が多いって。現に隣
の大陸には黒髪の民が居るらしいし今じゃ年寄りや頭の固い連中し
か本気で信じちゃいないよ。」

ニコニコしながらネティーの鎖骨ほどまでの黒髪を遊ぶ。

「じゃあせめてそのサローニヤ大陸に連れて行ってよ。そこで暮ら
すから」

アシエルの手から髪を取り返し一歩下がる。

「ダメ」

「なんでよ。いいじゃない、あんたならそれくらい直ぐ出来るでし
よ、ケチ」

「ペットがご主人様の目の届かないところで暮らすなんて聞いた事
がないね。サローニヤ大陸って別名暗黒大陸だよ。ここよりも危険
だと思っうなー僕う」

「だから私はあんたのペットでも何でもないって言ってるでしょー
が！それと私の名前は山根寧々だけけなすー！」

こんな会話が三日前から何度も繰り返されている。アホが間違え
てネティーを召還して返す方法が分からないとぬかした時には、目
の前が真っ暗になった。しかもこんなふざけた性格で本気でどうに
かしようと思ってくれているようにも見えない。逆にどこか面白が
っている節がある。その証拠にトリップから半年も放置され、三日
前ようやく現れたと思ったらこの有様だ。

「まあまあ、自分で付けた偽名に文句いわないのー。理不尽に怒っ
てる君も可愛いけどね」

ふふと笑いながらネティーの頬を白魚のような手で撫でる。

「でもお、そろそろ移動するのもありかなーって思っただよね。こ
こは空気だつて悪いし、飼育環境に向かないと思っただ。だからお
引越しようね？可愛い小屋を用意してあげるからね」

顔は相変わらず微笑んで美しいが、頬を撫でていた手は唇、首へと移りネティーの肌を撫で回す。

「きつきき……気持ち悪いって言うてんでしょおお！変態！」

アシエルの手を叩き落とす。

「焦らすなあ、じゃあ続きは次回ね。ではまた明日、僕の黒猫ちゃん」

叩かれた手をさすりながらアシエルはすうーっと消えていった。

「何時見てもファンタジーな世界ね……」

はあく、と深くため息をつき時計を見るともう4時だ。そろそろ寝ないと明日の仕事に遅刻してしまう。寝る支度をさつと整え、明日こそは事態が好転しますようにと願いながらネティーは眠りに落ちた。

2 (前書き)

今回、少し残酷な描写が含まれます。苦手な方はご注意ください。

「じゃあ次は、明日の廊下を飾るバラをとってきな」

「はい、マルジ様」

お次ぎはバラか、本当に捻くれてるなボスは……

バラには棘がある。この世界の植物の一部は、地球のものと違い自らゆらゆら動くという余計なオプションまで付いている。微量ながら知能がある分、摘む時抵抗するので心が痛む。故に積極的にやりたがる者が居ない。

「手袋くらい貸してくれたっていいじゃない、あのだケチ」

ハサミを準備し、行きたくない気持ちを抑えながら温室に向かう。素手で摘むなんてあり得ない事だが、マルジはネティーに防護手袋を貸す気なんて勿論無い。過去5回ほど言いつけられた経験はあるが、全戦手が血だらけになるという記録更新中である。

お屋敷の裏手にある温室の鍵を開け、中に入るとむせ返るようなバラの匂いに包まれた。

「はい、ローズちゃん。痛くないですよ。ちょっつとちくつとするだけですからね」

早速嫌な気配を感じたのか、バラ達は警戒するようにゆっさゆっさと体を揺らす。ネティーはハサミを片手に引きつった笑顔と猫なで声でにじり寄り、花の三十センチほど下を素手でぐっつと掴む。

バラは苦しそうに暴れ、棘が肌に食い込む。

「うっ……」

痛みに思わず出そうになる声を、歯を食いしばって耐える。滲み出る血に構ってる暇はない。ここまでくると後はスピード勝負だ。

下手に苦しみを長引かせるよりは早く楽にしてやったほうがこの子達のためなんだと、ハサミで一気に茎を切って行く。

「ごめんね……恨みがある訳じゃないのよ。枯れたらちゃんと埋めてあげるからね」

トカゲの切れた尻尾みたいに痙攣するバラの束から一本づつ取り出し、棘を抜いてゆく。それが終わると次は血だらけの茎と自身の手を洗わなければならない。

最後にバラの束を紙で優しく包み、準備の総指揮をとっているマルジのところを持って行く。昨日からの寝不足のせいか脚がふらふらするが、この忙しさも明日までだと思つと頑張れた。

「マルジ様、お花をお持ちしました」

「ふんつ、流石黒猫だねえ、こつも簡単に命を奪えるんだから。わたしや真似できないよ。こつという仕事をさせるためにお前を雇つたんだと思えば、お前の存在価値もあるつてもんだ」

花束をネティーの腕から奪い取るように受け取ると、いつものごとく一言嫌みを言う。いつもなら黙つて聞き流すが、今日は反応してしまつた。

「……うつさいわよ」

「あん、何か言つたかい？」

ぼそつと言つたのが良かったのか、マルジの耳が少し遠かつたのが良かったのか、聞こえなかつたようだ。

「いいえ、何も申しておりません、マルジ様」

「ふんつ、今日は掃除用具の片付けと使用人廊下の掃除が終わつたら帰りな。ちよつとでも手を抜いたら解雇だからね」

「畏まりました」

深くお辞儀をすると、マルジは鼻息粗く去つて行つた。

今日も遅くなってしまった……

せめて日付が変わる前には家に着きたかったが間に合いそうになり。繁華街に面した中央通りにはまだ人がいる。一方ひとつ通りを入れば静かなものだ。辺境の田舎町であるからか、暮らし始めてから今日まで凶悪な事件は二、三件しか起こっていない。勿論、窃盗や喧嘩などは頻繁にあるため決して平和ではないが、触らぬ神に祟りなし、首を突っ込まなければ平穏でいられる。

家まで後もう少しというところで、突然背後で悲鳴が聞こえネティーは振り返った。

「きゃーやめてえええ」

「うっせえよ、こっち来いって言ってんだろっ。このくそアマ！！大人しくしろよ」

嫌がる女を髭面の男が殴りつけ、無理矢理引きずって行こうとしている。女には悪いがネティーにはどうにも出来ない。見てみぬ振りを決め込み去ろうとしたが、女と目が合ってしまった。

「ちょっと！あんた助けてよっ！」

「えっ、あ、あのっ……私じゃ力になれないかと……」

もごもご言いつつじりじり離れていると

「ん？……お前……」

男が何かに気づいたように掴んでいた女を離し、ネティーに近づく。その隙に女は脚を引きづりながら、こちらを振り返る事無く逃げて行った。

「な、何ですか？」

「お前……黒猫か？」

はつとして頭に手をやると、どうやら被っていた外套のフードが外れていたようだ。男はネティーの黒髪に気づいたらしい。

「はつはつはつは！こりゃあ面白れえ、黒猫にお目にかかれるとはなあ。お前本当に人間か？俺が調べてやるよ。その後、見せ物小屋にでも送ってやるぜ、へへへ」

先ほどまで幽霊でも見たかのような目で呆然とネティーを見つめていた男は、突然小汚い黄色い歯を見せながら嫌らしく笑い出した。アシエルに感じるとのはまた違った寒気をネティーは感じた。この場を離れなければと本気で走り出そうとしたが、男のほうが一瞬早く、ネティーの肩を掴む。

(いやああああ)

ネティーが声にならない悲鳴を上げたその時

「うーん。心の広い僕でもさすがにそれは許せないなあ。勝手に僕の物に触れないでくれる？」

言うが速いかネティーの肩を掴んでいた男の腕が宙を舞った。

「え……？」

ネティーも男も目の前で起こった事が理解できなかつた。肩にあつたはずの男の手は今肘から下が地面に転がっているのだ。事態を飲み込めない二人をよそに、アシエルは薄く笑いながらネティーを男から引き離し、自らの腕の中に閉じ込めた。

ぎゅうつつと力一杯抱きしめられ、あまりの苦しさにもがく。

「くっくるし……」

「ああ、ごめんね。君があまりに可愛かったから」

ようやく緩まった腕の中からアシエルを見上げると、全く反省の欠片も無い美しい笑顔が降って来た。

「すこーし静かにしててね、僕の黒猫ちゃん」

続けて何か呟き、ちゅつと額に口づけを落とすとネティーの意識はかすみ深い眠りに落ちていた。

アシエルは眠ったネティーを抱き上げ、男にこやかに微笑む。

「僕の容姿に心当たりがあるって顔してますね。そうですね。そうですね僕は仮にも聖者なので、無駄な殺生はしません。あなたが反省しさえすればいいのです。そうですね、まずは僕の物に勝手に触れた無礼な腕を踏みつぶして貰いましょうか」

(ん！？んぐぐぐぐうう)

声が出ない、脚も思うように動かない。恐怖から男は地面に這いつくばり、涙を流し許しを請う。

「ふふふ、声なんて出させませんよ。汚い男の声なんて聞きたくありません。親切に術で腕の止血までして上げてるんですから、早くなさい。あ、死にたいなら別ですよ？」

このままじつとしていてもいたずらに時が経っただけである。男は意を決し、脚に精一杯の力を入れ己の腕を踏みつぶした。

「よくできました。ではこれからあなたには、死んだ方がましだ

と思う程の苦行を受けてもらいましょうか。楽しみですね」

（はっ話が違っじゃないか！）

「何を言ってるんですか？僕の黒猫に触れたんですからこれくらい当然です」

抱えたネティーを抱き直し、黒髪に頬をすり寄せながら、どこか夢見るように微笑むアシエルは知らない者が見たなら正しく聖者だが、目の前の男には悪魔にしか見えなかった。

月明かりが差し込む、家具といえは机とベットくらいしか無い粗末な部屋。その部屋に一瞬何か淡く光ったかと思うと、次の瞬間には背の高い銀髪の男がベッド際に立っていた。

男「アシエルは抱いたネティーをベッドに優しく下ろし、自らはベッドに腰掛けた。

「ねえ、ネティー。君はどうしてこんなにも僕の心を掻き乱すのかなあ？」

彼女の頬を撫でながら問いかけるが、その問いに答える者はいない。

「君を檻に閉じ込めて、観察していれば分かるかな？ そうすれば、いつも目の届く所に君が居るわけだし、安心だよな？」

頬を撫でていた手が大きく顎をなぞり、ぷっくりとした唇に辿り着く。漏れる吐息によりほんのりと湿った手で唇を割り、白く男の物とは思えない美しい指を一本押し込み舌に絡ませると、ネティーの舌は嫌がる様に口内を逃げ惑う。

「ふふ、可愛いなあ、早く……食べちゃいたい」

余りにもしつこく絡ませるアシエルの指に、眠っているネティーの眉間に徐々に皺が寄ってくる。それにも構う事無く、ぴちゃぴちゃとわざと音をたてながら指で口内を弄ぶ。

調子に乗り、指を二本に増やし歯列をなぞったその時

「ッ……」

無意識のうちに我慢の限界がきたのか、ネティーは少しの躊躇もなくアシエルの指に噛み付いた。たたりと流れる血に、機嫌を損ねるところか逆に嬉しそうにアシエルは指を彼女の舌に擦り付ける。

「さあ、僕の味をしつかり覚えるんだよ」

いやいやとまるで赤子の様に顔を背けようとするネティーの顎をもう一方の手でしつかり押さえつけ、狂った様に繰り返す。

「ぐふっ、ごほっごほ……」

咳き込むネティーに、ふと我に返り指を引き抜くと二人の間を名残惜しむかの様に銀の鎖が繋ぐ。自身の血とネティーの唾液によってふやけた指を自らの口に運び、まるで甘い蜂蜜を味わうかのよう
に真っ赤な舌で舐めとる。

「ふふふ、君の味がする」

ちゅっちゅん、ちゅっちゅん

姿を見た事はないが朝になると騒ぎだす鳥の鳴き声と、窓から差し込む眩しい二つの朝日によって目覚めるいつもの朝。

「うーん、よく寝たー！」

上半身だけ起こし大きく伸びをする。よほど深く眠っていたのか、最近溜まりっ放しだった疲れが一気にとれたような気がし、気分が

良いネティーだったか

「ふわあ〜……ん？」

大きくあくびをした時に鼻に抜ける違和感に、思わず舌で口内を探る。血の味がするのだ。さては口内炎でも出来たのだろうかと思っただが見つかからない。腑に落ちなかったが、ぎゅるるる〜と鳴ったお腹に意識が移り朝の準備に取りかかるうちに忘れてしまった。

「いただきまーす」

朝食にパンのような物とリンゴのような物を食べながら、そう言えば昨日どうやって家に帰ったんだっけっと思う。女の悲鳴を聞いてから厄介ごとに巻き込まれそうになった所までは思い出せるのだが、その後が全思いつけない。食事の手を止め、暫く考えていたがこうして家で無事に朝を迎えているのだから、上手く切り抜けたんだらうと結論づけ、食事を再開した。

魔法や変な生き物がうじゃうじゃいる異世界、ちっちゃい事を気にしていたら精神衛生上よくないとあのアホが放置していたこの半年で嫌という程学んだのだ。

今日のパティーであの嵐のように忙しかった日々も終わる。あのアホが現れたからには、きっちり地球への帰り方を吐かせなければならぬ。

この世界に半年居たとはいえこの容姿のせいで友達なんか一人も出来なかった。恐れ、蔑み、そう言った視線を浴びるだけだった。教会の人々は優しくかったが、それは哀れな黒猫に生まれてしまったことに向けられた慈悲の心であり、私個人への感情は無かった。

私の世界に帰りたい。最初の一ヶ月は恨んだり泣いたりしたが三

ヶ月も絶つと諦めた。何せ助けが来ないのだ。それに全く持つてお約束の役割だとかも与えられていないようだった。

「そういえばあいつ、昨日は来なかったわね」

この半年のことを思い出しているうちにむかむかして来た胸を押さえながらふと思い出した。また明日くるからね、とか抜かしてなかったかあいつは。まさかまたこのまま放置……

恐ろしい考えが脳裏をよぎったが、ぶんぶん頭を振りその考えを追い払った。

「まさかね……今日来たら縄で縛り上げて尋問しなきゃ」

ネテイーは決意を新たに、頭に深くフードを被り仕事へ向かうべく玄関を出た。

(嘘でしょ…)

目の前の光景が理解できず固まってしまった。豪華な木彫りの扉を背にネティーの目線は一点に縫いつけられ動かない。

「やあ、ネティー」

視線の先には普段通りニコニコ笑う彼がこれでもかという程贅を凝らした部屋で優雅にお茶を飲んでいた。ここは領主の屋敷でも一番の部屋だが普段はここまで飾り付けをしていない。こんなに飾り付けたのはここ数日で、勿論それは大事なお客様のためなのだから。

そうか。彼だったのだ、大事なお客様とは。

相変わらず体は固まったままだが反する様に冷えてゆく頭に浮かんでくる推測。こいつは知っていた、知ってって黙ってたんだ。面白がっていたんだろうか、すべて。

「どうして…どうしてあんたがここに居んのよ？」

絞り出すように、良く耳をすまさなければ聞き取れないほどの声で言ったにも関わらず彼は楽しそうに答える。

「どうしてって分かってるくせに」

「分かんないわよ！」

「ふーん。じゃあ、ヒントをあげようか？でもそれなりの対価をもらうよ？君は賢いと思ってたんだけど違ったのかな？」

美しい金の瞳を三日月みたいに細めてふふと微笑みながらも目の奥が笑ってない。何か気に障ることも言ってしまったかと一瞬不安になったが、彼の機嫌を取ろうとするそんな自分に気づき気分が悪くなる。

「僕をすっかりさせないで？さあ思ったことを言っていていいんだよ？」
不機嫌に拍車がかかったネティーに今度はからかうように問いかけるアシエル。

「じゃあ、言っておける。私をからかって楽しかった？満足した？
…それで十分でしょ！帰って！もう帰ってよ！！」

「あの…失礼ですが、聖者様は私どもの使用人とどういったご関係
で？」

喚き散らすネティーの声を遮ったのは彼女をこの部屋に連れてきた執事の問いだった。遮ると同時に聖者様に対する無礼を咎める目をネティーに向ける。

「あ、すみません大きな声を出したりして」
当然といえば当然だがこの部屋にはネティーだけではない。尊い聖者様と黒猫を二人きりにするはずが無い。出勤早々に女の召使いに呼びつけられ執事の元へ行き、さらに連れて行かれ辿り着いたのがここだった。室内におしゃべりな女召使いが居らず執事だけであったのは不幸中の幸いであろう。

急に自分の立場を思い出し黙るネティーに態とらしいやれやれと
いった表情でアシエルが口を開いた。

「僕の前ではそんな従順な態度とらなくせに…猫かぶりさんなん
だから。あつ、もう猫だね僕の子猫ちゃん」

呆れたような表情からふわっと花の蕾みが綻ぶ様に美しい笑顔に
なった男。

ぞわつとした。それはもうぞわぞわむずむずする背と反論をした

い気持ちを押し込み斜め前の執事をちらりと盗みみると、固まっていた。執事服をきつちり着こなし、真っ白な髪は常に乱れをさらないオールバック。人当たりのよい笑みを浮かべている老紳士の驚きと混乱も理解できる。嗚呼、もうすぐ失望するかもしれない、聖者様が変態だったなんて知ったら。

「ところで貴方、僕たちの関係が知りたいのでしたっけ？」

相変わらず扉口で押し黙るネティーと石の様に固まる執事に飽きたのか革張りのソファにゆったりと腰掛け、優雅にお茶を口にしつつ執事に目を向ける。

聖者様の高すぎず低すぎない耳に心地よいテノールの声に正気を取り戻した執事が、アシエルの座るソファに少し近づき緊張した面持ちで問いかける。

「はい、聖者様。差し出がましいとは思いますがお伺いたく存じます。本日の訪問の目的が当家の使用人であるのは間違いないようですが、旦那様との面会もなしには、聖者様と言えどもいささか強引かつ少々礼を欠いた行動ではなかと…。いえ、聖者様を貶めるつもりがあつての発言ではございません。下位とは言え男爵家にも貴族の矜持がございます。主人に変わって私がお尋ね致します。それ以上に重要とは、こちらの使用人に何かあるのでしょうか」

問われた男は手にしていたカップを置き、小首をかしげながら答える。

「うーん、何かあるっていうより、この子は僕のものペットだから引き

取りにきただけかな？」

は？ 啞然。 呆然。

先ほどまで意図的に黙りを決め込んでいたネティーだが今度こそ声が出なかった。この変態は今なんと言った？

再び固まるネティーと執事。

時が止まったかのような室内で、窓縁に飾られた花瓶のバラ達だけがうのように動いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3527r/>

黒猫って言うな！

2011年11月10日04時45分発行